

府中刑務所見学会レポート

夜間主 在校生

序 男女別に三列に並び、もしなにかあった場合のために女性を中の列に入れて、見学者人数を3回ほど入念に数え、刑務官の方々の敬礼を受けつつ、刑務所に入った。

まず最初に、講堂に入って、総務の刑務官より、府中刑務所概要説明を受ける時間帯があります。府中刑務所は、1790年に設置された石川島人足寄場にルーツを持ち、その後巣鴨刑務所を経て現在の府中へは1935年に移転した。敷地面積262,055㎡定員は2842名（日本最大）です。

本論 さっそく見学順にレポートをすると……

外国人独居：三畳くらいの部屋にベッドを導入。トイレは丸見え、房内には、洗面道具、位しかめぼしいものは無く、殺風景な印象である。食事の指定あるいは購読雑誌のプレートが扉の前に張られており、この部屋の主が、外国人であることを無言で印象付けられる。ラジオやテレビがあるが、指定された日本語放送しか見えないのならば、寂しいように思われた。言語習慣の違いにより外国人は殆ど独居房とのことだった。

日本人独居：広さは三畳の畳敷で布団。それ以外は、外国人独居房と変わらない。日本人受刑者は、基本的に雑居房に入れられるらしいので、独居房は、集団生活に適さない性格を持った者や使役を放棄してまで要求をするなどの問題を有する受刑者に限定されるとのことだった。

雑居房：広さは9畳。ここに6名ないし7名の受刑者が生活するのだから、手狭な感じを受けた。トイレは、独居房と異なり、個室に区切られていた。基本的に日本人のみで構成されているが、外国人受刑者増加の為、試験的に外国人を数人混ぜている房もある。私物についてはかなり自由に持ち込みが許されているようであり、子供の写真や、H系雑誌などが棚に飾られていた。

グラウンド：体育祭の練習とかで、多くの受刑者がランニングや車輪ころがしの練習をしていた。刺青をした受刑者がひたすら真面目に走っている姿を見て、娑婆でこのように真面目にしていればこのような所にはいないのといった印象であった。

工場：インフルエンザの影響で、工場見学ができなかったのは残念であった。私は妹が保護監察官をしていた関係で、嫁入り道具がほとんど刑務作業製品であったことから、ここで作成される製品が、重厚な作りの商品であるという認識であった。見学会後で刑務作業品販売所に入ったときに感じたのは、重厚であるが、デザイン的には昔と余り変化がない、言い換えれば新しさを感じない商品であるなどということであった。ここで作業を覚えて、社会復帰を目指す一助となることを、刑務作業の目的としている。しかし、ニトリ等の量販店で、廉価でかつモダンなデザインの商品と比較すると、やぼったい商品印象はいなめず、ここで旧態依然とした作業を覚えても、社会復帰した時にそこで雇われない可能性が高く、必ずしも刑務作業が、出所後に役に立つのか疑問に感じた。

食堂：第一印象は社内食堂のメニューについて文句を言っただけだと反省をした。大量に作るのだから、一日の一人分の食費は、200～300円程度だということ。献立は、若干品目が少ないと感じたものの、量は思ったより多く、また宗教上の制約から別メニューを作る作業をしている内部努力に驚いた。

作業：途中中庭で受刑者が草刈作業をしている光景に出くわした。本日受刑者に一番接近した場面であった。思ったよりも歳をとった受刑者が多いという印象であった。見学者としては、草刈り機を貸与されている受刑者が、草刈り機で襲って来られたらどうしようと、あらぬ想像しがちであるが、皆整然一致した行動をとっており、むしろ刑務官同士が、顔を合わせるたびに敬礼をしているほうが、凄みがあった。

質疑応答：構内見学終了後、最初の講堂に戻り、見学者の質疑応答があった。また、最終的には正門前での記念撮影は許可された。見学会終了後、釘澤先生の音頭で飲み会があったが、学年

を越えたメンツと今年度合格者の先輩も参加されてこの会もまた勉強になりました。

結 例えば、自分の依頼人が、刑事被告人になり、刑事事件を担当した場合、仮に有罪になって収監された時にどのような環境に置かれるのかといったことが、体感できて非常に勉強になった。机学では理解しがたいこういった体験は、法科大学院の学生はできるかぎり参加すべきであると思いました。

以上